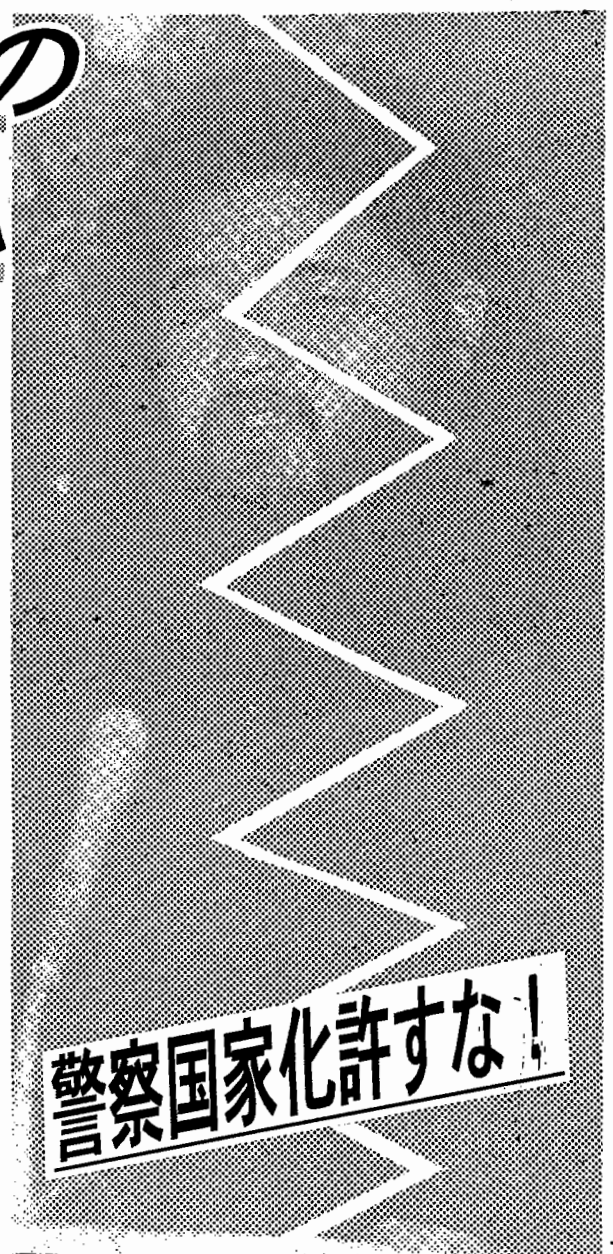


# オウム真理教は、宗教の 仮面をきたファシズム



## オウム真理教を徹底糾弾する！

五月一七日、オウム真理教代表・麻原彰晃容疑者が逮捕された。

オウム真理教とは、宗教の仮面をかぶったファシズムに他ならない。ファシズムとは、常に時代の危機を背景として生み出されるものである。オウム真理教事件と、その捜査をめぐって一挙にエスカレートされようとしている警察国家化―強権的な治安国家化の動き―この危険な動向に対し、今こそ、労働運動の再生を勝ちとらなければならない。

## オウム真理教その恐るべき教義

オウム真理教は、次のように言う。

「成就者が、生かしておく悪業を積み地獄に落ちてしまう人間の命を絶つたら、その人間

警察国家化許すな!

は天界へ行く。これは高い天界に生まれ変わらせるための善行である」、「人間界なら単なる殺人、殺生だが、マハーヤナ（大乘）の考え方があつたら、りっぱな善行だ」と。つまりオウムの教義では、殺害を認め、それを「善行」だとしている。

さらに言う。「最終戦争は起こる。そこから逃れた人たちが新しい人類を築く」、「成就せよ―救済される者は救済されるし、救済されない者は救済されないのだ」、そして「出家」―「救済される者」、「生き残る者」としてオウム真理教が「新しい人類」であるとし、「救済されない者」の存在と、その膨大な死を当然のものとして肯定する。つまりは自らが生き残るために人を殺せと教義は説く。

## 日本はナチスの手ごっこ教義

さらに、「ナチス・ヒットラ

―を崇拜する」と公言する麻原は、「ハルマゲドン（最終戦争）」を待望し、これを「人類を進化させる目的を持った戦争」と規定、「第三次大戦は私とオウム真理教の飛躍のジャンプ台だ」と、積極的に引き出そうとしていたのだ。しかも、「日本は広島・長崎で原爆の痛い目にあつた。次の大戦ではまた同じようにターゲットにされる」、「第二次世界大戦における日米戦争では、日本は自己主張が弱かつたから負けた」と排外主義を露骨にあおり、「自衛隊に言いたい。軍隊として世界へ出ようとするならば、核兵器、細菌兵器、化学兵器を持つべきである」と核武装をはじめとした、日本の軍事大国化の推進を叫びたてている。そして「日本はアジアの王として立ち、アジアの軍勢を引き連れ、ハルマゲドンに突っ込む」とまで言う。オウムは、「宗教」の衣をまとって帝国主義思想を代弁しているのだ。

## 治安弾圧へと向かう警察国家化

その意味では、オウムは時代の申し子として生み落とされたものだと言える。実際、「自衛隊が核武装化し、軍隊として世界に出る」という主張にしても、「日本はアジアの王として立ち、アジアの軍勢を引き連れ、ハルマゲドンに突っ込む」という主張にしても、小澤のいう「普通の国」路線の戯画に他ならない。労働者が時代の危機を撃つ闘いをつくりあげることができな

れば、「オウム破壊作戦」の中から生み出されるのは、より巨大な、国家の名によるオウムの道、政治のファシシヨ化の道かも知れないのである。

だからこそわれわれは、オウム捜査の過程で、ありとあらゆる違法捜査が大手をふつてまかり通っている事態に警戒心を強めなければならぬ。とくに自衛隊が警察と一体となつて、公然と動いたことは決定的な意味をもっている。これは戦後五〇年間一度としてなかつたことだ。支配階級はオウム事件を口実に、民主主義的な枠組みや価値観をくつがえし、警察国家化、治安国家化の道を一挙に進めようとしている。マスコミも意図的に「強い権力」を求める世論操作を行なっている。われわれは、このような動きを徹底的に弾劾しなければならない。

## 闘う労働運動の復権こそ核心点

最後に、オウム真理教をめぐる事件の最大の核心点は、何よりも労働運動の衰退があり、情勢を突き破っていく推進力を持つべき革新勢力が、社会党の転向や、「連合」に代表される体制翼賛化の中で、退潮、後退、屈伏し、一掃されつつあることにこそ問題がある。

ゆえに労働運動の復権こそ、その成否がかかっていると見える。「労働運動の新たな潮流」路線に基づく、「大失業時代を闘う労働運動」をさらに広範にひろげなければならない！